

浄土

1982-10

昭和十年五月二十日 第三種郵便物
昭和二十四年四月二十八日 運輸省（内閣府）認可
昭和五十七年九月二十五日印刷
第四十八卷



1982

— 花 —

大西 耕三



香は如来の使者なり

現在、香水というとフランス香水が代表しているが、それは、簡単にいうと香料の芳香をアルコールに移したものだといわれる。香料を焚くことによってその芳香を発散させるかわりに、アルコールの揮発性を乗せて芳香を発散させるのである。香水のことを、フランス語でパルファンというが、その語源はラテン語のベル・フルムで、「燃焼によって」という意味だそうである。つまり、香料が元来はそれを焼くことによって、その効果を發揮することを物語っている。現代のヨーロッパの香水の名にはジョイ（歓喜）、マ・グリフ（わたしのサイン）、シヨッキング（どきり）などがあるが、名は体の通り、感覚的な匂いによってまどわすことが多い。

本来、香は東洋、とくに仏教より發達したもので種類も大変多い。折る人の心が、立ちのぼる香煙をたどって仏に通い、仏のお慈悲の心が、香雲のなかに漂って人の心に通うという意味で、そこには心がはたらくのである。感覚的にのみうけとらず、もっと心を通う香を大切にしたいものである。



吾れ誓う仏を得るまでに普くこの
願を行じて一切の恐懼（くく）の
為に大安をなさん。

——『無量寿経』歎仏頌

目 次

法 話

阿弥陀経の話……………金子貫達……(2)

(一)(口)(法)(話)

経典を読んだら解説する……………村瀬秀雄……(6)

耳に逆らう言葉(続)

—先師・恩師を語る—……………峰島旭雄……(8)

＜勢至丸ものがたり＞第五回

宇宙船「母号」……………布村哲哉……(12)

エッセイ

落日……………木下隆一……(17)

＜連載＞

後鳥羽院と御製『無常講式』(二)……………宝田正道……(24)

仏教英語にたずさわって(上)……………原口正弘……(20)

道しるべ……………藤原円忠……(29)

＜読者のページ＞

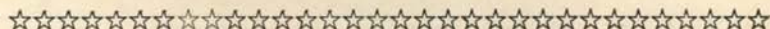
凝視……………吉田勇之助……(34)

浄土句集……………一田牛畝選……(32)

＜表紙裏・巻頭言＞ 香は如来の使者なり……………宮林昭彦
念仏ひじり三国志(101)——法然をめぐる人々……寺内大吉……(37)

表紙 大西耕三画

ガット 大正大学美術部



法
話

ハジ

阿弥陀經の話

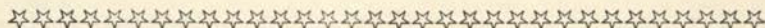
阿弥陀經の真髓

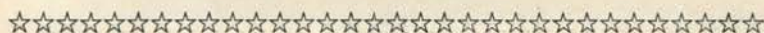
阿弥陀經は、無量壽經と、觀無量壽經の三部を合して淨土三部經といわれています。極

く短い經典で、各宗の信者から親しまれ、よく読誦されたり、写經されたりしている般若心經の約七倍の長さが、阿弥陀經であって、字数にして一八六〇字程度のものであります。

金子貫達

（総本山知恩院布教師会
九州支部長
長崎市聖徳寺住職）





阿弥陀經の概要

阿弥陀經では、太陽の没する西方、然も十
万億の仏土を過ぎて、極楽という世界があり、
そこに仏さまがましまして、阿弥陀さまと申
し上げるが、今も現にご説法を為しておられ
るのだ——とお釈迦さまは、先ずお説きにな
っておられます。

加えて、極楽国土の有様をつぶさに説明さ
れ、その極楽国にいる衆生、鳥類までの生き
様を種々述べられています。

幸いにも極楽国即ちみ仏のみ国に往生した
人々は、沢山の諸仏に護念せられて、正しい
悟りから退転することがなく、永恒に真実の
幸福をいただくことが出来ると説かれていま
す。

そして、阿弥陀の真髓、即ちお釈迦さまの
真精神を最後に手短かに次のように、「舍利
弗よ、まさに知る可し、われ五濁惡世に於て、

この難事を行じて、アノクダラ、サンミヤク
サンボダイを得て、一切世間のために、この
難信の法を説く、是は甚だ難きことなり」と
説かれています。

このお言葉の中、五濁惡世について少し説
明をいたしましょう。

五濁惡世とは、末世になると、五つの濁れ
た世界世情が現出して来るぞと予言しておら
れるのです。

一つには、劫濁で、時代は濁り、即ち戦
争、疫病、飢饉が多くなつて来る。

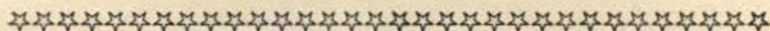
二つには、見濁で、思想が乱れて世状は悪
化する。

三つには、煩惱濁で、怒り、貪り、迷い等
の人間の浅ましい惡徳が人間を支配して来
る。

四つには、衆生濁で、心身とも弱くなり、
人間の資質は低下して来る。

五つには命濁で、人間の寿命が次第に短く
なつて、遂には平均寿命が十歳になると申し





ておられます。

この人壽十歳論は、是はどうもお釈迦さまの見込違いではないか、人の寿命は段々と長寿になつてゐるのではないかと反論も出ましようが、人壽十歳論は、お釈迦さまが先にあげられた劫濁、見濁、煩惱濁等で、尊い幸福の人生が遠のいて、よしんば年齢は長く現存しようとも、それは真正の人間の生きざまでない。正しい真実に幸福の生活は、真に寥々たるものだとして、数字で表わして小数の十単位で、僅かな生き方しか評価出来ないとして人壽十歳説を説かれたと理解したいのです。

次にアノクタラサンミヤクサンボタイの意ですが、この言葉はサンスクリット語で、中国語訳で、無上正等覺と云われ、この上ない立派なお悟りの意であります。

さてお釈迦さまの最後のお言葉、真髓の言葉をもっと碎いて申してみましよう。

舍利弗よ、よくわかつて貰いたい。自分は身心ともに悪化し、社会環境も浅ましくなっ

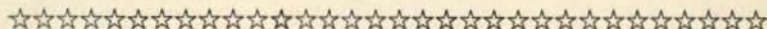
て来て、明日の平和、人々の幸福を保証することの出来ない社会に於て、一生をかけて法を説き續けて来た。

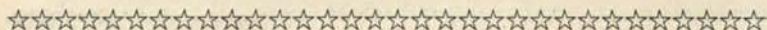
法とは何か。それは窮極するところの念仏の法である。念仏の法を、私は敢て「難信の法」と謂わざるを得ないが、人々に弘めるには極めて困難であつたからであると、釈迦牟尼世尊は舍利弗に申しておられます。

さて、念仏が難信とは一体どう云うことでしょうか。

念仏とは、一体どう云うことでありましようか。念仏とは、阿弥陀仏に「南無」と申して、即ち心を専一にして、称念することであり、祈念することでもあります。

み仏は、私達人間の親さまでありますので、いわゆる父子相迎して、喜びにつけ、悲しみにつけ、苦しみにつけ、思い煩いにつけ、親なるみ仏と語らい、親の智慧を乞願い、慈悲即ち、お護りを乞願うこともありましよう。若しも、念仏の内容に何の祈念も無いの





を是とするとしたならば、信仰の対象の仏とは無味乾燥の存在で、これでは宗教の粹から外れて大衆の関心を呼ばないのは火を見るより明かなことでしょう。

無味乾燥化した信仰教団から信仰的には脱落しているものの、辛くも祖先崇拜の形式である法事、葬式或は檀家という先祖からの因縁の糸によって、仏教徒の命脈だけは保持している現象を敏感にも観知した、あの日本占領軍司令官マッカーサーが、いみじくも「日本は宗教的空白なり」と米本国に向けて云った言葉は、残念ながら今にも生きていると云わざるを得ません。

五濁悪世の現実には、ずるく横着に、或は無関心に生活している者に取っては、宗教は或は無縁のものでありましょう。

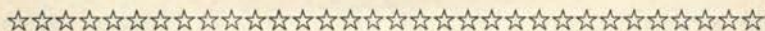
ましてや無量寿、無量光なる我等の真実の親仏さまに帰命し、念仏することによって身心ともに救われ、こよなく平安、喜びの生活をする事に成りますよと勧めてもナンセンス

と受取られる事が多いことでしょう。

お釈迦さま時代も、念仏とは「難信の法」といわれましたが、今も同様と謂わざるを得ません。然し「難信の法」の打開の一方法は、自らの親を通して永劫の昔への祖先の本源——無量寿、無量光なる即ち阿弥陀親さまのましますこと自ら信じ、人をして信ぜしむることにあります。

阿弥陀仏との親子関係の確立し、確信することこそ、現代に生きるべき浄土宗信仰の基盤であります。

お釈迦さまは、祇園精舎に集う多数の比丘衆、弟子等の代表として、舍利弗に、念仏の法は難信の法であり、難事であるが、この事を深く心して、あらゆる困難を克服して、伝道に努めるよう励まされて、阿弥陀経は終っている私は受取っています





(一) (口) (法) (話)

經典を読んだら解説する

むら せ ひで お
村 瀬 秀 雄

諺に「勸学院の雀は蒙求（もうぎゅう）をさえずる」といい、また「門前の小僧、習わぬ経を読む」という。これらはいつも見たり聞いたりしていても、いつか自然におぼえてしまうという意味である。それと同時に古人の伝記や經典を、意味も判らぬままに読んでいるということの譬喩でもある。

經典を誦誦することは、いうまでもなく大切な修行である。大經のむすびに、「たとえ全世界が猛火に包まれることがあっても、その火を潜り抜けてきて、この經典があることを知り、歡喜して心から信じ、經典を受持して誦誦し、教えの通りに念仏を唱えなければならない」とあるが、これは經典を誦誦することがいかに大切であるかを説いた句である。また觀經には釈尊が凡夫を勵まして、三つの善行を修めることを勧め給うている。その第一は父母に孝養をつくす等の道德的善行であり、第二は戒律を守る等の出家修行者の善行であり、そして第三は經典を誦誦し、人々に仏法の修行を勧めめる等の仏教徒の善行である。

善導大師はこの三善行について詳しく解説している。例えば父母に孝養をつくすことについては、釈尊が弟子の父母の安否を常に配慮し、乏しい食事はまず父母に捧げるように勧めた事例を挙げて、「釈尊すら孝養の念が厚かったことを思えば、誰

でもが孝養をつくさずにいられるわけがない。父母の思はこのように深く高く重いのである」と説いている。そして經典の読誦については、「仏の教えを知るためには經典を読んで学ぶのである。鏡は磨けば磨くほど明鏡となるように、經典を繰り返して読むことによって、次第に理解を深め、味読することができ。經典を読んで仏の智慧が明らかになれば、真理を悟るようになり、それに従ってこの世が厭わしく、仏の悟りを願ひ求めるようになる」と説いている。このように大師が、經典を何回も繰り返して読むことによって、仏の智慧を悟るよう勧めているのは、經典が大師の自国語に漢訳されて綴られた法門であつたからである。もしわれわれが大師の勧めに従うとすれば、訓読の經典を繰り返して読まなくてはならない。

法然上人は三善行のうちの經典読誦とは五種法師のことであると説いている。五種法師とは經典を受持し、読み、誦し、解説し、書写する人のことである。經典を受持して読誦することは、その法門によって修行するためであるから、經典の教理を十分に理解しなくてはならない。そして得られた理解によって少しでも多くの人々に

解説して、その修行を勧めなくてはならない。法門を人々に勧めるためには解説ばかりでなく、写経して多数の經典を用意して分け与えなくてはならない。このようなわけで上人は經典読誦とは、同時に解説と写経とを同時に行う修行であるとされたのである。上人は多念義の隆寛の質問に「源空も阿弥陀経を毎日三回読んでいた。一回は吳音で読み、一回は唐音で読み、後の一回は訓読していた。しかし今では一向に念仏を唱えているだけで、その外には何もしていない」と答えた。また大和の入道見仏の求めに応じて浄土三部經書写の次第を定めている。これによって上人が經典を訓読し、写経を大切な修行であるとしていたことがわかる。

ところで法華經法師品にある經典の受持、読、誦、解説、書写の五種修行は、經典に香をたき、花を供える等の十種供養と並べて説いているに過ぎない。また同經陀羅尼品には「この經典を受持し、読誦し、義をさとり、教えのごとくに修行すれば、甚だ多い功德が得られる」と説かれている。そして法然上人が經典の読誦とは併せて解説、書写することであるとしたのは、上人の新しい解釈であつた。

耳に逆らう言葉(続)

— 先師・恩師を語る —

「人生の師」という表現がある。前文で書いたように、十八歳のとき父をなくした私は、文字通りの「路頭に迷う」ことは辛うじて免れたが、人生の路頭に立って迷わないように導いてくれる師が必要であった。前文で触れた、私にとって「耳に逆らう言葉」をあたえてくれた先生がたは、本来、学問の師であった。しかしまた、その学問の師が同時に人生の師でもあったのである。

よく学問と人生とは別だといわれる。学問をしたから

峰^{みね} 島^{しま} 旭^{ひで} 雄^お

(早稲田大学教授)

といって人生に何も資することはない。学問は抽象的であり、観念的である。大学者必ずしも偉大な人物ではない。たしかにそのようにも言いうるであらう。しかし、最近私は、学問がほんとうに学問であるかぎり、人生と別個のものでなく、真の学者は人生の師たりうるといふように、考えるにいたった。学問は人生に役たないといふことで卑下してはならない。それはむしろその学問がみずから卑下した地位におとしめることになってしま



う。もともと学問は、人生と別のどこからか、降って湧いたように、生じたものではない。人生への深い洞察が学問という形をとったのである。したがって、私にとって学問の師であった方が、同時に、人生の師でもあることは、むしろ当然なことであった。

ところが、私にとって、まずもって人生の師であるような方がいたということは、私の生涯において、何にもまして仕合せなことであったといわなければならない。戦災に遭い、父がなくなり、人生の路頭に迷おうとしたとき、おなじ増上寺山内に、樹下信雄先生がおられた。先生は私にとって言葉の真実の意味において「人生の師」であった。そして人生の師は、やがて学問の師でもあった——学問と人生とが一体分離であるかぎりにおいて。

樹下先生は「腹の太い」方であった。清濁合わせ呑むといった気概があった。私が直接に接したのは先生の晩年であり、温かな顔ばせのうちにも厳しさを秘めたといった感じであったが、あるとき見た先生の壮年期の写真——おそらく大正・昭和初期の頃のもの——では、いか

にも壮気あふれた、きりつとした、人を魅するような風貌と気魄が感ぜられた。相撲・野球・鉄砲打ちなどスポーツと趣味の幅は広く、音楽・絵画・能楽といった芸術の鋭い感覚を持ち、単なるイデオロギーを越えた大きな視野から物事を見て、常人にはできない判断を下し、行くべき方向を明示された。さきほど人生の師はまた学問の師でもあったと述べたが、先生は学問のあり方についても見識を持たれ、いわゆる学者先生を痛烈に批判された。しかし先生は、学者タイプの人でもその人格に惚れ込むと、礼を尽くして接し、その態度は生涯変わらなかった。先生は戦災に遭ったとき、顔面に大火傷をされたが、かかりつけの川村幸一先生の家伝の妙薬によってさしもの大怪我も快癒した。「医は仁術」を体現しているようなこの川村先生のお人柄を、先生は心から尊敬し、礼を尽くして大事に扱われていた。

大島徹水上人の次のような話を、私はたしかこの樹下先生からうかがったと思う。増上寺の法主であった徹水上人は、ある日、信者の家へ招かれ、法要を勤められ

て、のち、おもてなしがあった。御馳走になっているあいだに、上人はご飯粒を畳の上に落とされた。信者は、この偉い上人がこれをどうなさるかと思つて見ていると、上人は氣にとめることもなく平気で食事を続けられた。普通の人だと、あわてて粗相を詫びるとか、そのご飯粒をいそいで拾い上げてお膳の端に置くなど、するであらう。しかし上人はそのまま食事を終え、お碗にお茶を流して洗い、そのとき、落ちていたご飯粒をひょいと拾つて、お碗に入れ、お茶とともに吞んでしまわれた。見ていた信者は、上人のこの何気ない所作に、いたく感動したというのである。

私は学生たちによくこの話を伝える。そしてこうつけ加えるのである。もし徹水上人でなく、私自身がそのような状況でおなじような所作をしたらどうか。おそらく信者は感動しないであらう。かえつて、なんと無作法なことをするものだなどと思うだろう。この差は何によるのか。それは、一口でいえば、宗教的人格が身についているかどうかの差である。おなじ所作が、一方では限らない感動を喚び起こし、他方ではかえつてひんしゆくを買うのである。「心」があるかどうかの差なのである。

樹下先生から聞いたとおもわれるこの話をするとき、私は必ず先生自身のことを連想する。徹水上人と先生とがオーバーラップして映るのである。私に対する次のような出来事を思い出す。それは敗戦後まもなくの時、まだドラム缶で風呂を沸かしていたような時代であった。先生のところへ伺うと、身辺の若い人たちがかわるがわるバリカンで散髪をしていた。ちょうどよいというので、先生は私に頭をかっていけと言われたが、それだけではなかった。先生はお風呂——ドラム缶ではない——に入つていけ、言われた。そこまでご迷惑をかけては、と恐縮している私に、先生はこう言われた、「頭をかって風呂に入るのは当り前のことなのだ。」風呂から出ると、爪が柔くなっているから、ついでに爪を切つていけと言われる。私はまだ二十歳にも充たない青二才である。しかし、先生の大きな眼中には、年齢の多少、身分の上下など問題にならず、散髪・入浴・爪切りという一連の「当り前」のことを、心を尽くして——先生自身にはそのような自意識もない——してくださっただけな

のである。

この先生の前に出ると、私はうそをつけなかった。うそをついても、そのことはもうすっかり先生には分かっているのだ、ということが分かるのである。先生はいずれにしても、ニコニコしておられるだけである。すべてが見通しなのである。百万言をついやしても、先生の最後の一言で事は決着するといった具合である。あるいは逆に、先生の一言に対して、こちらのすべてを話してしまないと、居ても立ってもいられないのである。神は、被造物の髪の毛を一本ずつ数えて知っているといわれるが、私も、先生の前に出ると、私の心と身体の間々まで知悉されている、見透かされているといった感じがするのである。それでいて、最後の落ち着き処はやはり先生の懷の中である。先生は、私にとって、もっとも優れた意味で、善知識であり、仏であったのである。前文で智慧が慈悲であると述べたが、ここでも、私は、さらに深められた意味において、智慧が慈悲であることを感得したといわなければならない。

最近、私は、「それがお前に出来るか」としばしば問うことがある。「耳に逆らう言葉」を言えるかどうか、「それがお前に出来るか」である。青二才の若造を散髪させ、風呂に入れ、爪まで切ってやるということ、「それがお前に出来るか」である。いかに理屈をこねても何にもならない。それが出来なければならない。しかし、私の現実には、とてもそこまでは出来ない、という段階であることを、告白せざるをえない。まったく出来ないとは思わない。が、そこまで徹底しては出来ない、という感がする。先師・恩師との距離は大である。

先師・恩師がなくなられて時が経つにつれて、そのイメージはますます大きくなる。へだたりはさらに拡大される。それでも、私は先師・恩師の行履をふみおこなうべく努めたい。たとえそれが徹底しては出来ないとしても。

(了)

勢至丸ものがたり

第五回

宇宙船「母号」



わたしは 勢至丸（せいしまる）。

宇宙船「なむ号」にのって この地球へきてから 九年がすぎた。

いろいろなことが たくさんあった。
やさしい父や母とのくらしは 宇宙での旅とおなじよ

ぬの
むら
てつ
や
布村哲哉

うに たのしいものであった。

「うれしいね」「よかったわ」と よろこびあえる毎日
だった。

「地球へきて よかった」とおもえる日々であった。
この美作（みまさか）の国の山や森や田や畑が わたし

の宇宙であった。その小さな宇宙は、あのかぎりなくひろがる大きな宇宙と、ちっとも、ちがわないようにおもえた。

木や草は、それぞれに、自分たちのもって生まれたいのちをそのままに、葉をしげらせ、色とりどりの花をさかせている。

庭であそんだ小犬や、池の鯉。

竹うまごっこの、友だち。

みんなが、めいめいに

「ぼくは、ここにいていいんだね。」

「わたしは、ここにいられて、うれしいわ。」
といえるところであった。

それなのに――

あの日照りからである。

稲はかれ、小犬が死に、池の鯉は、日ぼしになる。

食べものがなくなり、父親が、が死した友だちは、武

士の家へ火をつけて、そのままかえってこなかった。

そこは「こまった」「どうしよう」「うらんでやる」という、にくしみあうところ。あらそい殺しあうところだった。

やっぱり、あの宇宙と、この地球とは、ぜんぜん別の世界だったのだろうか。わたしの地球への旅は、かなしいものであったのだろうか。

では、いったい、なんのために地球へきたのだろうか。

父と母は、いっしんに折ったという。

「どうぞ、わたしたちのところへ、ほとけさまの子どもをおさずください」と。

こうして生まれたわたしが、ほとけさまの子として、だいにそだてられたことは、いうまでもない。

いつも、父と母とわたしは、手をあわせて、ほとけさまをおがんだ。

「だれもがみんな、ほとけさまの子どもだから、たすけあわなければいけない。」

と、いつていた父。

だが、

「わたしには、それができない。」

殺しあうことしかできない。にくしみあい、うばいあ

うことしかできない。

生かしあうことができないのだ。そこは まっくらなやみだ。

だれもが『ああ あかるいな あかるいな』といいあえる道を みつけておくれ。」
といいながら ひかりをもとめた 父のさいご。

春にあった あのできごとが まるでうそのような稲岡庄（いなおかのしょう）の秋。

まわりの木々も色づいて きょねんよりは いくらかしゅうかくのありそうな稲のとり入れに、お百姓たちはいそがしく たちはたらいしている。

母とわたしは えんがわにすわっていた。

そのとき ひよどりの親子が 庭のくさむらへとんできた。まだ 子どもは よくとべない。

母が 手をあわせていう。

「どんなものも みんな ほとけさまのいのちを いただいているんですよ。そのいのちを 親が子へ つたえ

ていくのです。

ほら あのひよどりを ごらんなさい。親どりは いっしょうけんめいにさえずって よくとぶことのできない子どものひよどりを まもろうとしているのです。とべるようにはげましているのです。子どもの いのちを生かそう生かそうとしているのです。

親が さえずる声を 手をあわせてきいてごらんない。

『がんばりなさい。しっかりしっかり』といている。みんなほとけさまのいのちを 生きよう生きようとしているのよ。

人も けものも魚も虫も 木や草や花も ほとけさまのいのちを 生きなければいけないのよ。

どんなに つらいことがあっても いやなことがあっても 生きなければ。ほとけさまの いのちなのだから。」

そのしゅんかん、さっと とびだした いたち。

ひよどりの子をおけると もうその姿はみえない。

親どりが ひくく舞いながら きいきいとなく。ためいきをする母。

「かわいそうなこと。生きたかったのでしょうに。また
ほとけさまのところへかえっていくのね。」
じっと手をあわせる母。

さまざまなことがあった わたしの家ともおわかれ
だ。

だれも いなくなる。

小犬も いない。

鯉も いない。

友だちも いない。

父も いない。

母も いない。

そして わたしも。

ただ そこにとびかうのは 宇宙船のかずかず。

山や野原を わあわあと あそびまわった友だちたち
の「わあわあ号。」

田や畑を はねておいかけた鳥や虫の「びょんびょん
号。」

森や林を ふきぬけていく風の 「ざわざわ号。」
「小犬号」「鯉号。」
あかあかと あたりをてらす ひかりは「父号。」

母は わたしの手をとったままだ。

「母上、しばらくのおわかれです。おじさまのお寺へい
くのですから あんしんしてください。」

わたしは げんきな声でいうと 手をはなそうとし
た。

母は はなそうとしない。

あんなにやわらかく にぎっていたとおもう母の手は
わたしをしっかりとつかんで はなさない。

それでいて やさしくつつんでくれている。

やっと 母が いった。

「そうよ この手。

この手が ほとけさまにおねがいして さずかった子
どもの手なのよ。わたしたちが ほとけさまから おあ
ずかりした子どもの。」

ほとけさまの いのちがながれている手なの。
わたしの だいじな だいじな子の手だもの。

もう けっして はなれることはない。けっして は
なさない。」

そういうと 母は そっと手をはなした。
そして 手をあわせる。

母の手のなかに いのちの聲が きこえる。

「げんきに 生きてちょうだい。ほとけさまの いのち
を。しっかりと しっかりと。げんきでね。」

ほとけさまの いのちの歌が きこえる。

「おぎゃー おぎゃー おぎゃー」

「ごくん ごくん ごくん」

「すや すや すや」

ほとけさまの いのちが ひびく。

「うわー うわー うわー」

「あはは あはは あはは」

「えん えん えん」

ほとけさまの いのちが とぶ。

「ふわ ふわ ふわ」

「びゅん びゅん びゅん」

「すい すい すい」

あの かぎりなく生まれつづける宇宙を。
かぎりなく明るい ひかりに向って。

いま 宇宙への旅立ち。

わたしの宇宙船「なむ号」を 正しくみちびいてくれ
るのは ひかりの宇宙船「父号」。

あたたかく 見まもってくれるのは いのちの宇宙船
「母号」。

わたしは 菩提寺（ぼだいじ）への道を あるきはじめ
た。

（おわり）

落日

近頃、しきりに落日に心が動く。人生の黄昏時に一歩足を踏み入れた証拠かも知れない。何やら血腥さを覚える暁の空よりも、滅びを予感させる夕暮の空の色が私は好きである。落日、落陽、斜陽、夕陽、夕日、夕日影、落暉、落照、夕照、残照、夕焼、夕映、夕茜、夕紅、晚霞、夕方、夕色、黄昏等々、夕暮にまつわるこれらの言葉を、私は愛する。



洛陽——黄河の一支流、洛水の北岸に位置

木のしたりゅういち
下隆一
(随筆家)

するのでこの名ありと辞書にあるが、遠く紀元前十一世紀、東周の成王の時、都に定められて以来、後漢、西晋、北魏などの主都であり、隋、唐の時代には副都として、治乱興亡の中よく命脈を保ち得た都邑である。「洛陽の紙価を高からしむ」の故事からも伺えるように古代中国の文化の中心地であった。水の在る所文明興るの例え通り、洛水の流れが洛陽市民の生活を支えていたことは疑いもないが、洛陽はまた落陽の美しい都ではなかったか、と私は思うのである。

都門に立って西の方を眺めれば、一草一木も無い茫漠たる黄土の起伏……。その果てに日が落ちて行く。夜は魍魎魍魎の跋扈する世界ゆえ、人々は太陽に、少しでも長く天に留まるよう願ったに違いない。落日は常に黄土の色を映して、落暉は黄色い光芒を放っていた。そしてその中に、人々は守護神である白虎の飛走する姿を見出して、明日の平安を祈ったのではないだろうか。

「洛」と「落」の文字の間には、さしたる関係は無いそうだが、洛陽は夕日の都であった、と私は思いたいのである。



いままでに見た一番美しい落日を挙げると言われたら、私は立ち所に一も二も無く、デカン高原の落日を挙げる。落日を眺めるには、何よりも広い荒涼とした景色がふさわしい。デカンの落日は、その最たるものであると思うからである。

エローラの石窟を見ての帰り、バスはテール状の台地の割れ目に作られた道を、のろのろと降って行った。目の下に廃城の崩れた城壁が連らなっており、そこは山蔭のせいもあって、すでに暮色が刷かれていたが、遙か麓のオーランガバードの町あたりには、まだ明るい春の日が当たっていた。羊腸の道を降ってバスが廃城の真中を貫く道の辺の小聚落に入った時、突然台地の一角に日が落ちかかった。その時、台地の天辺も、廃城の塔も、長い気根を垂らした榕樹の梢も、貧しい麦の穂先も、羊の群を追う少年の杖までもが、一斉に白い光を放射して燃えあがったのである。バスがオーランガバードに辿り着いた頃、空の残照も消え、デカン高原一帯は急速に春の宵に向って変容しつつあった。



六年前の夏の終り、アメリカ中西部を旅した時、機上から見たアメリカでも有数の穀倉

地帯は、目路の限り赤茶けた草原としか目に写らなかつた。早魘で潰滅的な打撃を受けていたのである。隣りに坐っていた私とほぼ同年輩の男は、

「全部玉蜀黍だが、何パーセント収穫できるか？」

と甚だ悲観的だった。飼料のほとんどをアメリカに依存している日本の牧畜の話をして、「これでまた日本の肉は値上りする」と言う。

「日本の肉は高いんだってなあ、アメリカで安い肉をうんと食って行ってくれ」

と男は笑った。

インディアナポリスの空港へは、玉蜀黍畠をかすめるようにして降りて行くが、なるほど玉蜀黍はみな立ち枯れているように見えた。飛行機のタラップに立った時、丁度、起伏にとほしい平原の彼方に、意外に小さい赤い塊が沈むところであつた。

夕映もなく、何とも味気ない眺めで、荒野

の落日、ふとそんな思いが胸に來た。



昭和五十三年十月二日。この日午後になって日蝕が始つた。雲一つない空にとんぼが群れており、太陽は徐々に蝕まれてその光を失つて行つた。いつもよりはやく黄昏がやつて來て、秋風が身にしみた。暗い太陽の面を、時へ急ぐ鵲の群が幾つも横切つて異常な啼き声を残して去つた。しばらくして、太陽は徐々に恢復して來たが、黄昏の色を払拭するにはいたらず、復原を見ないまま、大室山の右肩へ、ストンと、文字通りストンと釣瓶落しに落ちて行つた。

いままでに何千回となく夕景は見ているが、あんなにも不機嫌な落日を私は見たことがなかった。生涯、二度とこんな落日を見る機会があるだろうかとその時思ったが、「ないだろうな」と、独りごちて、足許でじやれて仔犬を抱きあげたことだった。

(丁)



仏教英語にたずさわって (上)

原 弘
口 正
弘

外国語を学び始めた者にとって最初の喜びは、ひとことでもふたことでも、自分のこれ迄育ってきた環境の中で、一度も口にしなかったコトバが相手に伝わったときであろう。覚えたての言葉には好意がこもり、口から出る言葉は行為の一つのあらわれでもある。しかし、少しづつ知らない言葉を勉強しながら次に思うことは、自分の意思が思うように表現できないことのもどかしさだろう。そして誰もが共通してそのあと感ずること、それは如何に自分が色々なことに無知であったか、と。何故なら外国語を学ぶことは他でもない外国語を通して自分の

これ迄、日本で生まれ育って得た知識を見直すことでもあるからである。その意味で英語を学びながら当人は、如何に日本のことを知らなかったかを知るのである。

外国語ここでは主に英語を指す——を学ぶ上で二つの姿勢がある。一つには、英語を習得することによって、海外から伝わってくる情報・知識・ニュース・世界の動きなどを直接に感じとること、その為に勉強することである。特に海外交流・人的交際・ペンフレンドなどをもった場合は語学の習得は不可欠である。もう一つの語学に対する姿勢というのは、日本在住の、あるいは日本を観

光する為に訪れる外国人の人達に、日本を案内紹介するためのコミュニケーションとしての手段に用いる英語に對するものである。英語にいくら堪能であっても、日本に對する知識が皆無であつたならば日本の説明は英語では出来ない。それどころか日本語でも説明はおぼつかないだろう。英語はコトバであり、コトを知らずしてコトバは語れない、といわれる所以である。

書籍売場に出かけてみると、英語による日本紹介の本がこのところよく、レジやウィンドウに並んで置かれてあるのを見る。それらの本の中には我々日本人が読んで参考になるものもいっぱいある。私も何冊か買って読んだ。これ迄のような一方的に日本を紹介する本でないことがよくわかる。つまり外国人が素朴に抱く疑問、単純な質問、そこが知りたい、というようなところに明確にふれて、わかり易く説明がなされているのである。最近読まれている本の中に、この類の本をさがすとすれば、「英語で紹介するニッポン」ジャパンタイムズ刊、「ザ・ジャパニーズ」タトル出版、「日本―その姿と心―」学生社、などがある。辞典としては「和英日本文化辞典」ジャパンタイムズ発行、が役に立ち読んでみて面白い。

また、日本の事象を多く掲載しているものに、「ツァーコンパニオン」紙がある。外国人が宿泊するホテルのロビーなどに置いてあるが、それには仏教・神道の祭り、伝統芸術など、ありとあらゆる日本の事象が季節感に合わせて盛り込んであるので参考になる。風呂の入方、箸の使い方なども毎回載せてある。

外国人と英語を通して話してみてもその都度感ずることは、相手の質問の中に我々はあらためて質問の中味を再認識させられ、さらに勉強をせざるを得なくなるということである。質問の中に答えがかくされているとよく言われる通り、我々日本人が英語を学ぶ場合、少なくとも相手方の、日本をもっとよく理解したい、という要求に応ずることが出来るよう努力し、知識と語学力をのばすことが必要であらう。

仏教英語研究会という会をご存知でしょうか。私事で恐縮ですが、私は現在その会にたずさわっています。ここでは毎週金曜日、仏教系大学の諸先生を講師にお招きして仏教に関するお話をわかり易く、而もニューモアをとおり交えながら、英語で講義をしていただいています。私は事務局員でもあり研究員でもあるので、毎回の

講師と講義のスケジュールを適当に調整して、一般の方、外国人日本人を問わず、のご参加ご聴講を呼びかけながら、私自身も聴講しています。聴講される年齢層は大学生からご年輩者までさまざまです。特に外国人の方はとても熱心で、講師の話すひとことひとことに耳を傾け、講義がおわってからもよく質問されています。そこでわかることは、むしろ外国人の方が非常に日本の仏教文化に関心をいだいているということです。また、一般在家日本人聴講者も、最初は英語を単にコミュニケーションの手段としてだけ興味をもって勉強してきた者が、日本の仏教文化に、いや仏教に直接触れていくその講義を通して、仏教英語という特殊な分野ではあるが、あらためて日本の文化、日本の仏教文化に対する認識を深めていきます。その役割をこの仏英研が橋渡しとして果たしているのです。

「お浄土」「お悟り」「ご本尊」「脇侍」「阿弥陀さま」「精進料理」「修行」「禪の教え」「坐禅」……。これらを仏教について余り知識をもたない外国人に一体我々はどうのように何と説明を加えたらよいのでしょうか。仏の教えを他の言語（自国語以外の）におきかえる時、

まずもってその語のふくみをもった内容が頭の中にしっかり整理されていなければなりません。そしてそれに対する表現方法は、語る側のこれまでの仏教への接し方と、かつ聞き手となる相手側の仏教の理解の程度との双方のかみ合いです。いつでも説明は対機説法をとるのです。説明する表現の仕方には自然とその人の人柄が浮きぼりにされてくるから不思議です。だから辞書の中に書かれてある、通り一遍の説明では対話は生まれてきません。その意味で仏教英語を学ぶ者は単なる文字の通訳者であってはならないのです。お坊さんが、数少ない限られた単語の中からでよい、一所懸命に仏の教えを英語でもって真剣に語りかける、その真摯な態度の中に彼らは僧侶を見、仏教にふれるのである。学問なら自分が勉強すればよい。知識を得るには本を読めばよい。しかし人の生き方となると、その人に直接ふれることが最も望ましい。生きざまがわかるからです。本を読む場合も、出来れば前もってその本の著者に、講演を聴きに行ってお顔を拝するとかして、直接お会いする機会をみつけることができれば文章が一段と身近かなものに感じられるでしょう。

さて、仏教を英語に訳す、語る、といったら皆さんはどうお感じになりますか。必要以上にむずかしく考えてしまうのではないでしょうか。通訳とはわかり易く説明することなのです。四歳になる息子はこのごろ様々な質問を私にあげてきます。「海の水は何故塩からいの」「お月さまはどこから出てくるの」「怪物は口から火を吹くのに」「どうして自分は」熱くないの」「お父さんは、うちのウズラは何でも食べるって言ったけどどうしてウメボシは食べないの」……。子供の質問に対しては、わかりきっていることであるが、大人のことはでなく、子供が聞いてわかることばで語るべきです。そしてそのことは、とりもなおさず一種の通訳を我々大人がしている訳です。これをむずかしく答えてしまうと、答えにまたまた相手の質問を含ませてしまい、それこそエンドレスクエスチョンが空回りの状態になってしまう。

ことばを覚えてたての幼児がさかんに話をしようとして何かしゃべっている。はたで見ていると何を言っているのかよくわからない。それでも母親は、その時の様子で子供の言わんとしていることをよく察知して、いまこれこれと言ったのよ、などとまわりの人達にいつてくれ

る。この場合も、その母親は立派に幼児ことばを大人のことに通訳しているのであります。娘が二歳になったばかりの頃、食事が終わると、「おじいちゃんお婆あちゃんでした」といってちっちゃな手を合わせ、椅子を下りようとする。はたで聞いているとわからないが、本人は「ご馳走さまでした」といったつもりなのである。同じように、難解な仏教教理はやさしい平易なことばで英語になって伝達されることが必要である。

外国人の最も興味をもつものに、禅、Zenがある。禅宗は「不立文字」を標榜しながらも、皮肉なことに一番多く書物が出回っている。最もこの言葉は「文字ヲ立テズ」ではなく「文字ニ立タズ」と読むそうであるが、いずれにしても外国人は仏教というとすぐ禅に結びつけたがります。禅の教えは、仏教にふれて生活している私達でさえ、なかなか奥義まではかり得ません。その点、タトル協会出版の英文「禅コミック」は禅の教えを漫画でコミカルに描いており、禅の真髄にふれたところの面白さがにじみ出ている作品です。聞法ということばがありますが、これからは目で説法を聴く（見る）ことも一考の余地であります。

(つづく)



後鳥羽院と御製『無常講式』(二)

たから だ まさ みち
宝田正道

(浄土宗出版室長)

二、承久の乱

後鳥羽院は、院宣・宣旨を通じて討幕の挙に加わる兵を過大に評価し、机上計算によって朝廷軍の勝利を信じていた。しかし、承久三年(一二二二)五月、北条義時追討の旨に応じて院の味方に馳せ参じた武士は、予想に反してわずか三万に過ぎなかった。

これに対して、幕府軍は、実に十九万の兵

を動員、各地に宮廷軍を撃破して都に乱入、ついに院を含む三上皇を配流に処すという前代未聞の下剋上が決行され、公卿五人の死罪その他峻烈極まる断罪が行われた。

この戦いで知っておきたいエピソードが二つある。一つは北条政子の勇壮な尼將軍ぶりであり、他の一つは院のお坊ちゃん育ちを暴露した幼稚な弁明工作である。

幕府の側では、最初、討幕の宣旨を受けた時、北条義時以下首脳部は、朝敵として院に

刃向かうことに、非常な危惧を抱いていた。

『増鏡』によると、東海道軍の若大将に選ばれ、わずか十七騎の手勢を率いて先発した長子泰時は、途中、ただ一騎、鎌倉に駆け戻って、「もし、上皇が自ら前線へ出て指揮してこられたら、どう対処すべきか」と尋ねた。

その時、執権義時は、「やむをえぬ。武器を捨てて降伏せよ」と答えたという。実際には、院が先頭に立って出陣しなかったから、これはこれだけの話にすぎないが、こんな仮説が囁かれるほど、幕府の将兵は、朝敵になることを怖れ委縮していたのである。これを叱咤激励して一致団結に導いたのが、尼將軍政子である。『吾妻鏡』によれば、諸將士を前にして政子は、声涙ともに下る大演説を試みた。亡き頼朝以来の恩顧に報い、一人一人の生活を守るためには、この幕府最大の危機に全員が一致団結、決死の覚悟で武器をとる以外にないことを、切々と訴えたのである。この名演説を聴いた家の子郎党が、大いに戦

意を昂揚させ、たちまち発奮したことは、いうまでもない。

余談であるが、院の生涯は、この北条政子に、先に挙げた丹後局・藤原兼子の兩人を加えた三女傑によって彩られ動かされていた、といっても過言ではなからうと思う。

他の一つ、院のお坊ちゃん氣質というのは、机上プランだけによる無謀な、非現実的討幕計画そのものもさりながら、戦さに完敗すると、すべてを謀臣たちのせいにして自分は無関係と弁明してみたり、義時追討の院宣を取り消して幕府の申請どおりの宣旨を出す、と約束してみたりする君子豹変ぶりである。

大体、院はスポーツ青年らしく、向う意気が強い反面、涙もろいやさしさも持ち合わせていたことは、『古今著聞集』に出てくる逸話からも察せられる。

ある時、今津というところに強盗が出た。西面の武士を派遣したが、手におえない。院は自ら舟に乗って、逮捕の指揮に当り、やつ

と捕えることができた。強盗は、「まるで扇をまわすように軽々と權を揮って応戦される勇武の技に、すっかり参りました」と白状した。すると、院はこの賊を赦して「奴」とし、行幸のたびに従者としてつれ歩いた、という。

まことに、帝徳というのか、人のいい、甘いやり方といわねばならない。こういう性格が、いろいろな面で、側近に利用され、あるいは自らの過信性につながった、ともいえるのではあるまいか。

ともあれ、院は承久の乱に完敗して、隠岐に流謫されることになる。第一皇子であった土御門院(第八十三代)は、討幕の軍に加わらなかったが、自ら土佐(のち阿波)への遷幸を希望、第三皇子の順徳院(第八十四代)も、佐渡に流されるのである。

当時の京中の混乱ぶりを、『承久記』は、坂東方の兵共(中略)、或は一、二万騎、或は四、五千騎、旗の足を翻して乱入す。三

公・卿相・北政所・女房・局・雲客・青女・官女・青侍・遊女以下に至るまで、声を立て、おめきさけび、立ちまよう。天地開闢より王城洛中のかかることいかでか有りし(下略)

と記述し、保元の乱や平家都落ちの時でさえこれほどではなかった、と嘆き呆れているのである。

これに対して、勝利の報を受けた義時は、「義時が果報ハ王ノ果報ニハ猶マサリマキラセタリケレ」(承久記・慈光寺本)と喜んでゐる。幕府が朝廷を制したのを、神仏の加護と「果報」の勝利と意識している点がおもしろい。

いずれにせよ、これで公武の勢力は完全に逆転して、院の生涯は榮華から怨念の流謫生活へと悲しくも暗転していったのである。

承久三年(一二三二)七月六日、院は四辻の仙洞御所から鳥羽殿へ移され、六波羅からの要請で八日出家、剃髪して法皇となられた。

法号は良然である。

十三日には、早くも配所隠岐へ奉遷することと決定した。院はその直前、鎌倉殿藤原頼経との縁でその父道家に一縷の望みを托し、「君しがらみと成て留させ給わんや」という趣旨の消息を送って減刑を訴えたが、むろんむだであった。その切々たる心境は、添付の一首「墨染の袖に想を懸よかし涙計りはすてもこそすれ」の歌によくあらわれている。

ともあれ、お供には出羽前司藤原清房（清寂）、施薬院和氣長成（医師）、西の御方（坊門局か。内大臣藤原信清の女）、伊賀局（白拍子亀菊法名婦本）、左衛門尉藤原能茂（西蓮）、それに聖（教念か）を加えて、わずかに数名が従ったにすぎないといわれている。

今日、隠岐までは、大阪空港から島後の西郷まで約一時間の空の旅で行けるし、米子や出雲からも三十分ぐらいで一飛びできる空路もある。船便ならば、山陰境港から約三時間五十分で島前海士町菱浦港に着く便利さであ

る。

しかし、中世の隠岐行は大変であった。

まず、京都から淀川を船で下るか、徒歩で播磨あたりまで出て、美作・伯耆の山国伝いに中国山脈を峠越え横断の上、出雲の国大浜（美保関）の港に着く。そこで順風を待ち、日本海の荒波を小舟で渡るのである。

院の一行は、七月中旬の、そろそろ暑さの盛りに向う頃、都を出発、二週間がかりで大浜に着いた。同月二十七日である。そして風待ちの幾日かの後、船中大風による船酔いなどに苦しみながら、八月五日頃、やっと阿摩（海士）郡刈田郷の行宮（勝田山源福寺）に辿り着いた、といわれている。土地の領主佐々木泰清が急造した御所であるらしい。（出雲守護職・隠岐兼領か△吾妻鏡△）

このおはします所は、人ばなれ里遠き島の中なり。海づらよりは、少しひき入って、山陰にかたそへて、大きやかなる巖のそばだてるをたよりにて、松の柱に、葦ふ浦に

ける廊などけしきばかり、ことそぎたり云々（増鏡「新島もり」）

と伝えられるほどだから、よほど粗末な俄か普請であつたことが想像できる。

かつては極美の宮殿に百官を従え、万機の政事や趣味の諸芸に、自由奔放、贅の限りを尽し得た万乗の君が、今はその花の都からも遙かに離れた絶海の孤島に、親しく語る肉親とてなく、磯の苦屋に独り起き伏す流人暮しである。「おのずからこととふものとしては、釣りする海士の小舟、塩焼く煙のなびし方をも、我がふる里のしるべかとばかり、眺め過ごさせたまふ御すまひ」が、どんなに淋しく口惜しく心細かつたことであらうか、まこと痛ましの一語に尽きよう。

われこそは新島守よおきの海の荒き波風こころして吹け

の一首に、しみじみと実感のこもるを見る。しかし、この悲運の帝王に、心から同情を寄せて忠誠を尽す隠士もあつた。土地の豪族

で行宮近くに居館を構え、近在に隠然たる勢力を振つていた村上義綱一族がそれである。

村上家は、以後代々、院の霊位や陵墓にも奉仕し、明治時代にはその功績によって当主が隠岐御陵守部職に補せられた。現在でも村上家の口伝の中には、当時北条幕府の監視の下に祖先たちがいかに院に供御したかを伝える数々の証拠を探することができるのである。

一方、この前後、都では法然の遺弟たち、信空、証空、親鸞、聖覚、源智、空阿、隆寛らがまだ活躍中で、念仏停止の訴えは相変らず執拗に繰り返されていた、源実朝が公暁に殺されて源氏は滅亡、世はやがて嘉祿の法難や寛喜の大飢饉を迎える前夜であつた。但馬に流されていた院の第六皇子雅成親王（六条宮）が隆寛や聖覚、明禅らに念仏宗義についての質問状を寄せて来たのもこの頃である。院も心の憂さを和歌に託しつつ、そろそろ信仰に眼を向けるべき環境に陥っていくのである。

（つづく）

道しるべ



ふじ 藤 原 円 忠
えん ちゅう

(市原市無量寺住職)

仏教は入口が多く進むべき道も多い。そして悟りとか涅槃といった目的地ははるかかなたである。

それだけでなく各々の道がお互いに隣り合わせになったり交差し合ったりして非常に迷い易い。要するに一般の者にとっては道が多すぎるのである。

しかし、どの道を進んだとしても、或いは又途中で隣りの道に迷い込んだとしても、そこにある教えは深い意味を含んでいて、私達を驚かせ私達を傾注させるに充分なものがあって、その意味では正に偉大と言うべきであろう。

だが、そこでいちいち感心しては日が暮れてしまいう（一生が終ってしまうのだ）。

そこで、人間の一生という期間的条件の下で、確実に仏のもとに行き着ける近道を選び出す、という作業をなされたのが宗祖法然上人である。

法然上人は、仏教にはいろいろな道があること、そして特別な能力をお持ちの方が「一番大きな道を選んで歩み続け、自分の力で実力を養い、仏の城の表門をさがし当て、そこから入って表玄関に到り、仏と同じ貫禄（自分も仏となって）で仏様と五分五分の対話をする」、とい

う在り方を否定はしていない。出来るならそれに越した事はない、と言われている。

しかし、お釈迦様と同じような特別な能力を持つ人というのは、特別の特別であって、まして一生という期間的条件の下でそれを達成しようというのは一般的ではない、ということ看破された。

ならばどうするか。どうしたら良いのか。そこに法然上人は最大の命題を置かれて心血をそがれた結果、仏教のいろいろな道の中から「迷わず、今すぐに、近道を進んで行きなさい、そして、仏様が木戸を開けて下さっているから、その木戸から入って仏様のお側近くに参りなさい」との教えを立てられたのでした。

十三歳から四十三歳迄の修業中の法然上人は周囲の宗教家から「智慧第一の法然房」と称讃される程の叡智の人でしたが、昼夜を分かたぬ勉強修業の結果、仏教のいろいろな道を同時に進むのは無理なこと、またそれぞれの道の途中にはいろいろと異なる深く深い教えがあっても、行きつく目的地はどの道を進んでも要約すれば同じところへ集まって行くということをつきとめ、それならば一生という期間的条件の中では、他の道を気にして脇

見をして時間を無駄にすることなく、確実に仏様の前へ到達出来る近道だけを進むべきである、ということを決断されました、このご決断が「浄土宗」の教えとなり、更に広まって「浄土真宗」や「時宗」などの教えともなつた。

法然上人は、ご自身のことを「おろか者の法然房」と言われておりますが、それは、人間のレベルで見た時には智慧第一と言われる高い知恵ではあっても、「仏教の、あの道この道と迷った自分(すべての道を同時にマスター出来ない自分)は、仏様の目から見れば「おろかな一個の人間」でしかないのだ」、という謙虚な反省から出た言葉だ、と言うべきであらう。

恐らく、一步仏の境地に近づかれ、一段高い観察眼を持つに到られたのであらう。

更に法然上人は、この近道を信じて進む者が受ける仏様のお護りとして、

- 一、重く受けるはずの病氣も軽く受ける(転重軽受)
- 一、ガツガツ求めなくても幸せがめぐって来る(不求

自得)

一、この世の生命が終るときには阿弥陀様がお導きをして下さる (弥陀来迎)

というご利益があるのだよ、ということをお教えられている。

この有難い近頃に入ろうとする者は、どうすれば良いのか。

法然上人は「先ず一心にお念仏を称えなさい」と教えられたのである。先ず一心にお念仏をすれば、仏様のお力(他力)が働いて、自然とこの近道を歩いていることになるのである。そして、「その道を一生が終わる迄踏み外さないように」、との称名念仏の教えを残されたのである。

この近道を歩みながら、この世での幸せ、あの世での安楽が成り立てば、それこそ、最上の生き方だったと言えるのだという。この不易の道しるべを法然上人は私達にお残しになったのだと、有難く受け取らせて戴く次第である。

村瀬 秀雄 著

|| 新刊 ||

『全 訳 法然上人 勅修御伝』

B 6 判 八四七頁 価六八〇〇円

|| 好評 ||

『和 訳 浄土三部経』

B 6 判 四七四頁 価二五〇〇円

『和 訳 法然上人 選 択 集』

B 6 判 三八七頁 価二五〇〇円

『和 訳 善導大師 観経四帖疏』

B 6 判 五八四頁 価三五〇〇円

『和 訳 善導大師 六時礼讃』

B 6 判 二六五頁 価二四〇〇円

取扱い 法然上人 讃仰会

浄土句集

一田牛畝選

着けばすぐ浴衣を召せと通ひ湯女
福岡 林 澄山

評 温泉宿は可成り遠かつたらしい。着いて直ぐ通ひ湯女が浴衣を召せと、実に親切である。一風呂浴びて浴衣に替へてのビールはさぞかし美味にちがいない。

山梨 青山富貴江
雨はれて一人茶席に蟬しぐれ

は倅だ。

福岡 原 敬二郎

評 雨が激しく降っている間は蟬も鳴き止んでいるが、止めば又一しきり鳴き出した。その中で一人静かに茶事が進められている。まことに静かで奥ゆかしいことならん。

濡れいても誰も不平を言はぬ梅雨

盆僧の声のかれたる読経かな

福岡 荒牧 還愚

評 雨が降ってあれば野外運動も出来ぬ。今日は浄土宗の前田先生の教誨に来られる日だ。そして先立った死刑囚の回向の間に、詠唱を織り込んで回向して下さるのだから、死刑囚に待たれている前田先生

評 今年九州地方は初め空梅雨で降らなかったが、待つ甲斐あって雨が降り出した。そんな年であったので、濡れても不平をこぼさず喜こんでいる相が嬉しい限りである。

評 棚経廻りで朝から晩まで、さぞかし声もかれる事ならん。

福岡 前田 秀峰

春雨や教誨待てる死刑囚

東京 吉田ゆきゑ

暑氣払ふ百万遍の念珠の音

山口 上野 明達

評 雨が降ってあれば野外運動も出来ぬ。

わが背ナの少し丸みて秋立ちぬ

評 暑氣払いの百万遍を繰っている。繰っている本堂はさぞかし暑いことならん。こんな宗教行儀は残したいものだ。

今日は浄土宗の前田先生の教誨に来られる日だ。そして先立った死刑囚の回向の間に、詠唱を織り込んで回向して下さるのだから、死刑囚に待たれている前田先生

評 背ナを少し丸めて何かしているのであるが、その姿は何となく秋立ちを覚えさせるようである。

杖片手八十遍の胡摩叩く
福岡 高良 慈風

東京 真野よし子
ペンタント素肌にさらと薄暑かな

群馬 島津 か寿
供養仏御手に蜻蛉をとまらせて

大分 丹羽 難中
おてつぎの子供は元氣氷水

東京 小笠原香祥
露こぼす風のやさしき菖蒲池

三重 山田 うた
僧堂の廊長々とほととぎす

福岡 行正 明弘
大広間ゆえ涼しさの寺なりし

東京 猪瀬 幸子
俳聖の藝侍らせて御堂中

福岡 荒牧 亀齡
新しく撞木買ひ替え盆用意

福岡 永江 隆説
久方に海酸漿を買ひにけり

東京 吉原登起子
朝晴れて土しめやかにえこの花

福岡 上滝津弥音
万緑の札所遍路の絶ゆるなく

福岡 釈河野ねはん
夏萩や毘沙門天の深廂

東京 末常てる子
玄関に初夏の花をば心して

福岡 服部 光代
能終えてくつろぐ夜の宿浴衣

山形 松田 允子
咲きみちて手まり紫陽花無住寺

東京 阪入志津枝
雑草の勢ひつづきて梅雨に入る

福岡 高良 幸代
蟬時雨せせらぐ古処の溪に佇つ

山形 松田 光替
辞書めくる一字一語に徹の風

東京 真野 竜
行楽の人声遠き牡丹園

福岡 深井 鉅士
くさぐさのお供えをして盆供養

山口 三井 寛静
梅雨明けて無風の畝を刈って居り

東京 新井 新生
神の池水にさえたる花菖蒲

福岡 安藤平次郎
金魚玉まっすぐ見入る児の眸

一田 牛畝
賑やかに晋山式の菊の宴



(読)
(者)
(の)
(べ)
(一)
(ジ)

凝 視 (ぎょうし)

回復の見込みのない病いにおかされているある僧のたつての申し出に應じて、医師が秘していたその病名を告げたところ、僧は始めの元氣は何処えやら失せてしまった。そして、その僧の死期を早やめたという話を、何かで読んだ覚えがある。

死を恐れている人間が、その死期を知らされることは限りなく恐ろしいことで、死期を知らされて、氣が転倒するのも当然である。死の中で一番おそろしいのが自己の死である。死を静かに迎えとれるのは、常人のよくするところではない。

よし
だ
吉 田 勇之助
ゆうのすけ

私が、妻子の後に続いて疎開したのは、一九四五年である。疎開先に程近いところに在る温泉地で、中年の治療師が、私の顔を見て七十歳ぐらいまで生きられますよと言った。死を凝視し続けていた私ではあったが、未だ若かったのだ、あと二十五年はあるわい、という思いがした。そして治療師の言葉を受けとる心の深刻さも少なかった。

死に関心を抱き、死の恐怖を見つめ始めてから、半世紀以上にもなるか。

仏教の基本課題は生死である。生と死は隣り合わせで

あり、如何に生くべきかということは如何に死すべきかにつながつている。

諸行は無常で、常住不変なものは何に一つない。人間は絶えず変化して老いてゆく。私も時々刻々老衰して、やがて死に至る。

死を凝視しつつ、強く正しく乱れずに生きてゆくことは大変な難事である。

仏教講演会等で、導師の方が唱えられる「人身受け難し、今すでに受く……」から始まるあの帰敬文を拝聴する時、その日の講演を聴く以上に深い感銘を受ける場合がよくある。

そして、与えられた命の尊さがわかるにつれ正しく生きねばならない思いにみたされる。死は自然であって、人間が大自然に帰り赴くことなのだ。

死に関する釈尊の教えが、仏教の最古の聖典「スッタニパータ」の中には沢山ある。

「生れたものどもは、死を通れる道がない……（五七五）」とか、「若い人も壮年の人も、愚者も賢者も死に屈

服してしまふ……（五七八）」とある。そして「見よ。見まもっている親族がとめどなく悲嘆に暮れているのに、人は一人ずつ屠所に引かれる牛のように連れ去られる……（五八〇）」と説かれていて、拝読すると、全く心がおののく思いがする。

無量寿経にも、「人、世間の愛欲の中にありて、独り生れ、独り死し、独り去り、独り来る」とある。

釈尊の教えは現実的であって、知ることの不可能な死後のことについては語っておられない。煩惱の火が消え、欲望のあしきいとなみから解放された時、清らかな平安の境地にはいれるのである。そして、この境地を願って努めれば、何人もそこに到ることができると教えておられる。

「いかなる所有もなく、執著して取ることがないこと、これが避難所にはかならない。それをニルヴァーナと呼ぶ。それは老衰と死の消滅である。……（一〇九四）」

「つねによく気をつけ、自己に固執する見解をうち破って、世界を空なりと観ぜよ。そうすれば死をわたることができるのであらう。このように世界を観ずる人を死王は見ることはない。……（一一一九）」

疎開当時、治療師から言われた年齢（七十歳）を超えた頃からは、月日の経過が一段と早く感ぜられ、いつも、生の裏側にある「死」のことに思いがいつてしまう。そして、これを持ち超えられない焦りが強くなってきている。死を経験した後、再び生に戻ることは有り得ないだけに、死後の世界は恐ろしさを覚えさせるものだ。死とは何かという釈尊の御教えを忘れてはなるまい。

「欲界の散地に生をうくるもの、心あに散乱せざらんや。煩惱具足の凡夫、いかでか忘念をとどむべき。その条は源空もちからをよび候はず。心はちりみだれ、妄念はきをひおこるといへども、口に名号をとなへば、弥陀の願力に乗じて、決定往生すべし」とは、叡山第一の学匠とまでいわれた法然上人のおことばである。

自分のはからいを捨てて。そして、常に仏を念じつつけていくときに、死との対決の心がまえが、すこしづつ、つくられてゆくと思う。死後には何も無いように考えるよりも、何かあるように思っておいたほうが、現世をしっかり、よく生きられるのではなからうか。

|| 好評増刷 ||

小布施弘学著

『伝統の変容と進化』

— 仏教的視点より現代人への提言 —

○難解な仏教の教えを、新しいセンスで分りやすく説いた待望の布教書。篤実なる伝道者、故小布施弘学師の名調子が、一気呵成な筆致で展開される。すでに四版を重ねて、好評増刷中。

(申し込み先)

〒381-12

長野市松代町東寺尾三八八

長明寺

振替(長野) 一四三二二

B6判 二三〇頁 価一五〇〇円

(一五五〇円)



念佛ひじり三国志

(百一)

一法然さゆぐさ人々

寺内大吉

挿絵 松濤達文画



その曉方、住蓮房は検非違使庁からきた廷尉の手で逮捕された。左ノ獄へ連行され、カビ臭い石牢へ投げこまれた。

左ノ獄は、近衛の南、西洞院の西側にあって、後に獄門町と呼ばれたあたりらしい。当時の実状を覗き得べくもないが「今昔物語」の挿話などからのしるふことだけは

出来る。

阿清という僧がいた。二十四、五歳のとき疫癘（えきれい）が流行し、阿清もこれにかかって死んだ。彼に従った弟子たちは伝染を恐れ遺体を捨てて逃げてしまった。ところが一兩日して阿清は息を吹きかえた。通りかかった人にこんな体験記を物語ったという。

死んでから暗く茫莫たる道を西北方へ歩いてゆくと門楼の前へ出た。その内側にはいかめしい建物がたち並んでいた。検非違使の庁にそっくりだった。前庭には役人

どもが居並び、たちまち彼らは阿清をとらえて「裁き」にかけた。阿清だけではない。死人どもは次々にここで裁かれ、罪の軽重を決定された。決定を下された者は縛り上げられて、石造りの獄へ引きずられてゆく。罪人どもの泣き叫ぶ声は雷鳴のようだった。阿清は思わず身の毛もよだち、魂がぬけてしまう感じた。

そこへ美麗なる童子が現れて阿清を救い出す。この童子こそは地藏菩薩で、裁きの役人どもの前までついていてくれた。そして、この罪人は生前すでに如法の行者である。すみやかに放免すべきだ、と弁明もした。

おかげで阿清は再びこの世へよみがえることが出来た、という地藏菩薩の靈驗譚である。

その阿清が覗いた冥府、地獄へつながる「裁きの庭」——「検非違使ノ庁ニ似タリ」とある。阿清が現実の検非違使の庁を知っていたのかどうかは疑問だが、当時の日本人から地獄なみに恐れられていたことだけはわかる。

その分所でもあった西洞院の左ノ獄。ほうりこまれた翌日から峻厳な取調べが開始された。

住蓮の前に現れたのは山法師——

後には正式の刑部卿ともなった那智ノ検校長厳であった。

長厳は後鳥羽院にとつていわば「鳥帽子親」みたいな存在だった。治承四年（一一八〇）七月十四日、誕生のみぎりその安産を祈禱したばかりでなく、ぶきみな予言を生母七条院の耳もとでささやいたのである。

——この親皇は間違ひなく帝位に就かせられます。でもそんな予言を誰が信ぜられようか。

後鳥羽院の生母七条院は左大臣信隆の娘だ。左大臣とは言っても死後に「贈与」されたもので、生前は四位止まりだった。日かげの公卿にすぎない。

後鳥羽院の誕生に先立つ五カ月前、三つ年上の異母兄はすでに帝位に就いていたのである。安德帝。母は今をときめく平相国清盛入道の娘徳子、建礼門院であった。平家一門が全盛のまっただなかだ。この皇子がどうやって帝位を、という七条院の問いに長厳は奇怪な理由を述べた。

——新帝（安德）は不義の御子にましまして……

安德帝の出生に疑念ありと言いきるのである。だが、この疑念、必ずしも長厳の放言ばかりとも否定

＜明遍僧都と卿二位兼子＞



しきれない。裏付けるような記事が「源平盛衰記」にある。

——内大臣（宗盛）ノ有様コソハカナク無慙ナレ。ソ
レニトリテモ由々シキ事ヲ承ルゾトヨ。入道殿
ノ世ニオワセシ時ヨリ妹ノ建礼門院ニ親シミヨ
リテ儲ケラレケル子ヲ、高倉ノ御子ト言イナシ
テ王位ニツケ申シタリケルトカヤ

つまり安徳帝は、内大臣平宗盛が妹の建礼門院に産ませた子だというのである。そんな不義不倫の子だから、必ず長く帝位にとどまっておれるはずがない。必ず後鳥羽院にチャンスがめぐってくる、と長岐は生母七条院皇子を励ましたのだった。

この予言のぶきみさは、わずか三年も出ないでどんびしやりと的中してしまったことである。平相国清盛入道は熱病で急死、平家は源氏の軍勢に追われて敗走した。安徳帝も都から姿を消した。

新帝を選出しなければならぬ。この時点で、京洛の実力者は木曾義仲だった。彼は強く故三条ノ宮（以仁王）

の遺孤北陸ノ宮を推挙した。

以仁王は後白河法皇の皇子で「平家追討」の令旨を各地の源氏へ発した人だ。彼自身も源三位頼政の軍へ身を投じたが、敗北して光明山で死んでいる。当時七歳だった遺孤は北陸にかくれ、蜂起した木曾義仲に擁されて入京してきた。

しかし後白河法皇は武家の「紐つき」には平氏の前例で懲りており、安徳帝の異母弟に皇位を継がせなかった。

安徳帝の異母弟というが、これも二人いた。兄ノ宮は故高倉上皇が遊び女に生ませたもので後鳥羽院より一つ年上であった。順序として後鳥羽院が帝位に就くチャンスは三番手。母の七条院皇子も四位信隆の娘とあつてはきわめて薄弱な線であった。

九条兼実の日記「玉葉」によれば、この新帝決定は異例な「ト筈」で定められたのである。その「ト筈」も最初は安徳帝の弟君たちの間で占められたときは兄ノ宮に軍配が上がった。ところが木曾義仲が北陸ノ宮を押しつけてきて、あらためて三人の間で占ったら、後鳥羽院が最吉、兄ノ宮は半吉、北陸ノ宮は「終始不快」と出た。

木曾義仲は怒って「先ズ北陸ノ宮ヲ以テ第一ニ立テルベキノ所ヲ第三ニ立テラレルハイワレナシ。オヨソ今度ノ大功ハカノ北陸ノ宮ノオ力ナリ。イカデカ黙止スルヤ。ナオ郎党ヲニ申シ合ワセテ左右ヲ申サント云々」放言したと兼実は書いている。

さらに面白いのは、

「オヨソ初度ノト筮ト、一、二ノ条ヲ立テ替エラル。甚ダ私事アルカ。ト筮ハ再三セズ、而シテコノ立王ノ沙汰ノ間、数度ノ御占イアリ。神ニ定マレル靈告ナキカ」

神のお告げであるべきト筮が、占うたびにくるくる変わるのはどういうことなのか、と皮肉っている。

このト筮の操作に、那智の修験者長厳が一枚咬んでいた事実は明らかである。それは翌々年（文治二年）の四月、長厳は先の帝位継承時の運命線を守るのだと称して、五歳になる新帝後鳥羽に「方たがえ」を強要している。これまで住んでいた場所から別の方位へ住居を移すのである。大内裏を出て富小路大炊御門の左大臣経宗邸へ引越した。

長厳はそこで新帝の乳母兼子（藤原宗頼の妻。後の卿二位）が経宗大臣の息子経家と密通する現場を目撃してし

まう。兼子の弱点を握ったわけで、長厳出世の鍵ともな

った。

すでに生母七条院の知遇はあつく、その莊園大和宇陀郡檜牧莊を領職し、それを背景に出身地盤たる熊野三山に確固不拔の勢力を植えた。そして、たびかさなる後鳥羽院の熊野行幸を誘導し、正治二年（一二〇〇）には那智ノ檢校となった。

熊野三山でも従来この那智だけには檢校職がなかったのであるが、長厳はそれを新設した。もっぱら京の東寺に住んで後鳥羽院政の中樞で暗躍した。

尊長僧都と並らんで後鳥羽院独裁の左右両翼をになったことは言うまでもない。

ずっと後年になるが、承久ノ変でこの兩人は首謀者となる。長厳はすでに七十歳の老驥、前線には姿を現さなかったが、六波羅屋敷をひそむところを北条軍によって捕らえられた。結城朝光に身柄を預けられ、陸奥の国へ流され、安貞二年（一二二八）七十七歳で死んだ。

北条家や坂東武者たち、とりわけ念仏信者の間で山法師長厳への憎悪は、尊長僧都ともどもに激しかった。尊長は乱後、熊野へ潜伏していたが、ほとぼりがさめて京

へ舞い戻ったところを密告されて北条武士に斬られてしまった。

話は脇にそれるが、この承久ノ変で後鳥羽院の討幕計画に敢然と反抗した公卿がいた。徳大寺公経である。野宮左大臣と呼ばれた。元久二年、興福寺僧都が法然を糾弾したとき「弟子権大納言公経も重科に処すべし」と要求している。後鳥羽院が倒幕騒ぎに先立って、北条氏と通じている西園寺公経をを討とうと言いだしたとき、公経は強くこれを諫止する。公武が戦って何の利益があるや、と正論を吐いた。

ために徳大寺公経は捕らえられ、尊長僧都の手で幽閉されたのだった。

ちなみに西園寺公経は、法然の手で出家し、また法然没後にその七日供養の導師もつとめた西園寺実宗の長子である。徳大寺公経は年来の法然門徒であり建永の法難が、人脈のうえでも承久ノ変と深くかかわっていた事実を物語っている。

西園寺公経が逮捕拘禁だけでまぬがれたのは、彼が妻が尊長僧都の妹だった血縁による。

さて、その熊野法師長厳が住蓮房の取調べにあたっ

た。

「このよびのことは、白朱社以来のご英断に発するものだ」

いきなり熊野法師は耳馴れぬ言葉を口にした。白朱社とは何のことであるか。住蓮には見当もつかない。黙って聞くだけであった。

「白朱社のことを知らぬか」

長厳はいかにも楽しげにその古事を語りはじめる。

白河帝紀、応徳二年（一〇八五）のことだから百余年も昔の話になる。洛中で福德神と長福神という男女二体の神を祀り、これを交構させた神像を飲酒乱舞しながら礼拝する信心が蔓延した。いわゆる淫祠邪教である。

長厳によれば、住蓮たちによる六時礼讃の集りも、男白、女朱の結合を朗唱陶醉のうちに果たそうとする邪教だというのである。

応徳二年、検非違使は発動してその白い男神と朱色の女神を破壊、群らがる男女をすべて逮捕した。

「わしらが調べたところでは、お前たちは所詮踊り手で元凶は法然房じゃな」

ここでは、もはや黙してもおられなかった。

「それは違う。高德清廉のお聖人には全く関係がない」

「都人をたぶらかし、機を見て坂東の武士どもを導入し、一気に武家の天下を夢見ていたのであるが」

「お聖人は、鎌倉へ下られたことすらない」

「しかし、お前はその使者となって、しばしば出かけているであろうが」

「使者ではない。勝手に出かけたまでだ。安楽房ともどもに」

長敵の黒い顔に笑みがかすめた。

「その安楽房じゃが、鎌倉へ下る目的は將軍の御台所と密談をとげるためである」

「……」

安楽房はどこまで告白しているのか、相手の言葉尻から探ぐり出したかった。

「そうだな。あのひじりは坊門局とわりない仲になっていることじゃし」

坊門局は仁和寺親王の母后だったが、その妹は將軍実

朝の御台所となって鎌倉にいる。

「密談の内容は何かな」

「さあ、知らん」

「こんどは妹の局を院へ推挙してきた。いずれ男女が闇でささやき合うことは、謀り事にきまっておる」

坊門大納言信清の娘たち。

長姉は仁和寺宮の母后となり、次姉は將軍実朝の御台所。妹はいま後鳥羽院の寵妃となって同じ坊門局を名乗っている。

「男女の闇でのささやきは、みんな謀り事だと言うが、法師の場合もそうか」

住蓮はやり返してやった。

「わしの場合じゃと？」

「昔から七条院と謀ってきたのではないのかな」

「何を滅相な……」

強く打ち消したが、根は正直な男らしく黒くいかつい顔が一瞬赤らんだ。

長敵法師と、後鳥羽院の生母殖子との男女関係は、噂だけかと思っていたが、どうやらほんものだったらしい。

「安楽房もわしも生来の色好みだけよ。ほかに何の他意もない」

「生来の色好みか」

「いかにも。安楽房は先皇に仕えた北面の武士だし、わしとて昔は興福寺の衆徒だった。別時念仏会で、高貴な女人たちが身辺に近ずいてまれば手も出したくなるであらうが」

「するとお前が伊賀局と密通したというのは真実の話か」

「真実も何も……お局に訊いてみるがいい」

住蓮は一瞬、固唾をのんで返答を待った。すでにあの美少女へ取調べの手は伸びているであらう。明遍僧都の言葉によれば、卿二位兼子が確約しているからである。

「伊賀局は、お前のことなぞ全く知らんと申しておるぞ」

多分そうであらう。予期していた答えでもあった。

「知らぬか、知っているか、お局と合わせてくれたらわかるわい」

対決しないことには、この計画も水の泡となって消えてしまう。

対決——そうなのだ。住蓮は胸底であの美少女との再会を熱望していた。再会して、しゃべりまくるだけではないのだ。対決もせずに闇から闇へ葬り去られては、何のための忍辱であるか。

「それは、いずれわしらで判断することじゃ。その前に、安楽房が坊門局と密通しておるといふのはまことか」

安楽も吐いたな、と住蓮は内心でほくそ笑みたかった。

「だと思うぞ」

「うむ……わしも坊門局が広隆寺に参籠したところを目撃したが、宿坊にいた安楽を見るお局の眼は、ただごとではなかったな」

熊野の修験者。山奥で修法だけに明け暮れる山法師に、そんな男女の機微を洞察する眼が養えるであらうか。七条院殖子をはじめ、宮廷でさまざまな女体のあいだを泳ぎわたってきたにちがいない。

だからこそ九条良経の暗殺者と疑惑の眼を向けられるような端倪すべからざる動きも可能だったのであらう。「それにしても一条家の、何と申したかな、姉妹の女房」

「鈴虫松虫……」

「土御門帝が恋慕する高貴な姫たちを、いきなり落飾させるとは、法然房の罪も万死に値することになるぞ」

「あれは違う。吉水のお聖人がやったことではない」

「では誰が黒髪を削り落したのか」

「尊長……いや、伊賀局が」

「あれも伊賀局がなした暴挙か」

「そうだ。確かめたければわたしをお局に会わせるがいい。いかなる遁辞も喝破してみせるからな」

長敷は四角い顎を撫でながら考えこむ。彼が収拾した情報と、だいぶ喰いちがった面が出て来たのである。

「いかに武士あがりのお前らとは言え、かりにも念仏ひじりとなった者が、色好みに身をゆだねるとは余りにも自堕落ではないか」

長敷は、おのれの所業は棚に上げ、僧としての反省を住蓮にうながしてきた。そこには安楽ともども後鳥羽院の愛妾たちと密通したという告白に、いちまつの疑念も残ったからであらうか。

「末法末世だ。おのれの自堕落を、いくら改めようとしてもそれはかなわぬことだ。自己の内側から、周囲か

ら、自堕落の波が打ち寄せてくる。そんなことに氣を使う前に、まず他を救うことを心がけるのだ。おのれが救われないなどと窮々としているうちに、ちぢこまって石になってしまふわ。清浄潔白にしようと思えば、手を斬り足も斬って達磨にならねばならぬ。まず他へ向って行動することじゃ。他を救うべく身を粉にしておれば、おのれもその十分ノ一ぐらいは救われるのではないかな」

「お前はしきりと他人を救う、とくり返し言うが、何かやったのか。救うようなことを何か仕出かしたのかな」

「……」

「伊賀局と密通したことで、あのお局が救えたか」

「それは幾分かは救えたと思う」

「どう救ったんだ」

「あんなウツケ者のいけにえとなっている時間が、ちょっとは間引かれるであらう」

「黙れっ。うつけ者とは何じゃ」

「わしのもとへ忍んできている間だけでも真実の生き方が出来るというものだ。水無瀬の離宮なぞで暮らしていたらどうなるか。夜伽を争う女どものいがみ合いで身も細ってしまふ」

「黙れ、黙れッ」

長岐は本気で怒り狂った。院の悪口を叩かれることは、やはりわが身を罵られるような思いなのである。

三

その夕べ、住蓮の石牢へ瀕死の若者が投げこまれていった。苛酷な拷問で全身は血まみれ、着衣もずたずたにひき裂かれ、冷気のきびしい石牢の床に半裸の姿でうつ伏している。

声をかけても返事が出来ない。息も絶え絶えだった。夕食の稗飯（ひえめし）が運ばれたとき、住蓮は塩湯を求めた。

「贅沢を申すな。そんなものはないわい」

獄卒はにべもなく拒絶した。

「ようし。明日、那智ノ僧正の取調べのとき言ってやるぞ。僧正は欲しいものは何でも獄卒に申せ、と確約しているのだからな」

「那智ノ僧正がそんな確約を……」

獄卒は狼狽した。無論、出まかせだ。でも住蓮には自

信があった。長岐法師が四の五のと言ったら、いっさい取調べには応じないとおどかしてやればいい。

獄卒はしぶしぶ腕に熱湯と、ひとつまみの塩を運んできた。

住蓮は塩湯にして若い囚人の傷口をぬぐってやり、それを口中へふくませた。ようやく生色がよみがえった。「おぬし、何で此処へ投げこまれた？ 盗みか、それとも人を殺（あや）めたのか」

「……」

若者はじっと住蓮を見つめている。

「心配はない。わしは僧だ。何でもしゃべるがいい」

「……もしや、あなたは住蓮房さまではありませぬか」弱々しい口調ながら若者は、はっきりと名ざしてきた。

「いかにも。東山吉水の住蓮房じゃ」

「あなたのお説法を何度か聞いたことがございます。私は成覚房さまのところにいる明善と申すものです」

「何だ、おぬしも専修ひじりだったのか。どんな罪科でこんなところへ入れられるんだ」

成覚房は法然の高弟幸西である。この時点における幸西は高弟というだけでなく後継の有力候補として自他共

に許していた。比叡山南谷の学匠で、洋々たる天台教学界の前途を捨て専修念仏へ帰入した。彼の学風を慕って比叡山から参じてくる門弟も多かった。

若い明善房もその一人であらう。

「検非違使のやり方はまことに汚たないのです。先月の末ごろから巷へしきりと謀者を放って、念仏停止を言いふらさせるのです。そして東山にいる何でもない雑童童子などを搦らめ捕るのです」

「そうだ。そんなことがあった」

「うちの師（幸西）が調べたところ、正式に念仏停止令なぞは出ていないそうです。西面ノ武士どもが勝手にやっていることなんです。そこで私どもも各所で念仏の集りを持ちました。そこへ武士どもが踏みこんできて、ひっ捕らえるではありませんか」

「先月末ごろとは、建永二年の正月末である。公式に停止令も発令しないのにその噂を流布させ、念仏集会で官憲を非難する言動のひじりを容赦なく逮捕してしまふ。悪辣な挑発であった。

親鸞が引っぱられたのもこの挑発に乗ぜられたのかもしれない。

「それで拷問だが、此処の連中はおぬしに何を吐かせようとするのか」

「法然さまです。法然さまの命令で別時念仏会をひらい込んだらう。院の悪口を言いふらしたのも法然さまがそのかしたからだらう。何もかもそれ一点ばりなんです」

「うむ、やっぱり」

「一言、法然さまだと口にさえすれば即座に此処から開放してやる」

「我慢したんだな。言わなかったんだな」

「はい……それに法然さまなんて、私は未だ一度もお目にかかったことがございません。言いようがありません」

「正直な男だ。いや、そのとおりでお聖人は今度のこと全く無関係だ」

こんな名もなき念仏ひじりまでが法然の身を思つて権力に屈しないで頑張っているではないか。住蓮はわが身をいっそうひき緊めたかった。

それにしてもこの建永の法難時、おびたしい念仏ひじりたちが捕らえられ拷問を受け、処刑され流罪になつ

たが、師の法然を裏切るような行動は絶無であった。

わずかな例外としてこの明善の師幸西と西山義の派祖となる証空の動静に不明なものがあつたが、これとても「不明」であつて、「不純」とまで極めつけることは出来ない。

その動静とは、兩人とも阿波及び越後へ流罪と決定したが、実施はされず無動寺の前ノ大僧正善題の監視下に置かれることとなつた。

なぜそういう仕儀になつたかは「不明」であるが、その後における彼らの宗教活動を点検してみれば「不純」ではなかつたことが明らかであろう。

成覚房幸西は「一念義」を主唱して一部の念仏者たちから邪流とせしめられたものの専修念仏思想を八十五歳で入寂するまで変ることなく唱導し続けた。ことに法然没後の嘉禄二年（一二二七）には沓岐国へ流罪となつた。

その門下明信は宋に渡り、貴重な浄土教の文献を持ち帰っている。幸西はこれらの新資料を得て一念義の理論を強固にした。

証空は都に踏みとどまり困難な状況下、専修念仏の孤

塁を守りとおした。「愚管抄」の作者で天台座主だった慈円僧正が入寂するとき臨終の善知識をつとめたりしている。体制側とつねに対立してきた専修念仏者のなかで、稀少な存在だったと言える。

「いま幸西どの、どこにいるのか」

住蓮は若い明善房にたずねてみた。

「さあ、あのお方は何よりも書見がお好きな方です。どこか静かな山中の庵にでも籠もつておいでではないでしょうか」

「このときに静かな書見か」

住蓮はいささかの不満を洩らした。

自分たちが獄中で苦しんでいるとき、いや師の法然ですらあらゆる辛苦をなめているとき、天性の学究とは言え經典論釈とだけ取り組んだままの成覚房幸西なのである。

西山義の証空が後世の人々から過少評価されるのじつにこの点であろう。動乱の渦中で、その波が身に迫ると、いつも身を隠してしまつた行状に不満をおぼえるのだ。宗教は学問だけがすべてではない。主体はあくまでも実践であり行動であろう。

（つづく）

◎ 読者の皆様へのお願い

弊会会員の年会費は三、〇〇〇円です。月刊誌『浄土』を細々と発行しながら、念仏信仰の増進にと努力しています。新しい読者を広くご紹介下さい。

また、この機会に、『浄土』誌と会員諸兄の皆様とのより一層の繋がりをはかるために、従来よりたびたび企画されたことでもあります。誌面の数ページをさいて、不定期ながら随時、「読者のコーナー」を設けております。左記要領で、どうぞ振ってご投稿下さい。誌面充実のために、宜しくご協力下さいませ。

- 一、内容 自由 (生活の一コマや所感あるいは思うことなどをエッセイ風におまゝとめ下さい。)
- 一、枚数 四百字用紙五枚程度
- 一、締切 毎月五日

法然上人鑽仰会

「浄土」購読規定

会費一カ年 金三、〇〇〇円

(送料不要)

浄土 四十八巻 十月号

昭和十年五月二日

第三種郵便物認可

昭和五十七年九月二十五日 印刷

昭和五十七年十月一日 発行

編集人 宮林 昭彦

発行人 佐藤 密雄

印刷人 関 二三男

印刷所 長谷川印刷株式会社

東京都千代田区飯田橋一十一一六

発行所 法然上人鑽仰会

電話東京二六二局五九四四番

〒一〇三 振替東京八一八二一八七番

昭和58年度版

浄土宝暦

予約発売開始!!

ふるってのお申込みを!!

◎法然上人鑽仰会が責任をもって編集している「浄土宝暦」。
昭和58年度版がまもなく刷了となります。年末年始の好便
な権信徒用施本として、広くおすすめいたします。

B 6 判 総ページ数 40ページ

1 部単価 60円 (200ブ以上 55円)

送料実費 (400ブ以上はサービスします)

●なお、ご寺院名の印刷なども実費にておこないますのであら
かじめご連絡下さい。

できうるかぎりの便宜もおはからいいたしますので、多くの
方々からのご注文をお願いいたします。

お申込み

〒 102 東京都千代田区飯田橋 1-11-6

法 然 上 人 鑽 仰 会

(振替) 東京 8-82187